ほっとほっとタイムズ－第3号－

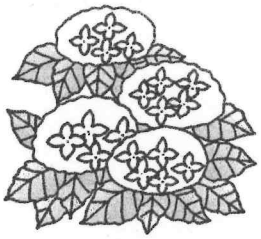
2022.6.17

井荻小学校　校内委員会

何十年か前のことです。転んで鎖骨を骨折する子が増えてきたと話題になったことがあります。つまり、転んだ時、とっさに手が出ないためにけがが大きくなるということなのですが、転びそうになったら手を出して体を守るという当たり前の反射神経が育ってないからだというのです。そんなものはだれでも自然にそだつものと思っていたので驚きでした。まだやっと歩けるようになったころ、よちよちしながら何回もころぶ経験を積むことで脳の中のシナプスがつながって、意識しなくてもできるようになるのだとその時学びました。「自然に育つ」と思われていることのほとんどが、実は「経験を積むことによってできるようになる」のです。そして、生活の変化が子供の育ちを変えているのです。

先日、１年生の教室にお手伝いに入った時のことです。担任の先生が「お手紙配りますから、連絡袋をお机に出しましょう。」と声をかけていました。多くの子が準備している中、まだ連絡袋が出ていない子どもが数人います。「連絡袋出そうか」と声をかけると「だって、うまく入らないからいやなんだもん」との答え。「手伝ってあげるからやってみよう」と促すと袋を出してくれました。ファスナーをしっかり開けてきちんと入れるのが少し大変そうでしたが、少しお手伝いするとうまく入れることができました。満足そうな顔でした。

１年生は、お手紙を配るのもノートを書くのも、ゆっくり時間をとってみんなができるのを待ちながら進めますが、高学年になるとそうはいきません。やるべきことがたくさんありますから、こうした活動は寸暇を惜しんで行うようになります。「高学年になったらできるようになる」と考えがちですが、みんながみんなそうなるわけではありません。高学年で目立つのは、手紙類を「面倒くさい」と机の中に無理やり押し込んでしまう子供たちです。連絡帳も「書くのが面倒」と、いい加減になっていきます。当然忘れ物も増えます。そうして「整理整頓の苦手な子」「めんどくさがりの子」と、生まれつきの性格のように本人も思ってしまっているように感じます。苦手だから経験が減っただけのことなのだと思うのですが。早い時期に、少し支援して自信をつけて活動を嫌がらない子にしておいてやることがうんと大事なのではないかと感じます。

人間は社会的動物と言われますが、社会性は自然に身につくものではなく、育てるものです。そして、「三つ子の魂百まで」とか、「十歳の壁」など、成長の節目を教える言葉がいくつかあるように、それぞれ育てるために大事な時があります。そして、**大人がかかわれるのも、せいぜい小学校時代なのではないでしょうか。**

以前、「先生、私は親に何の苦労もさせずに育ったのに、どうしてこの子はこんなに忘れ物が多いのでしょう。」と言われたことがあります。きっと、このお母さんの親御さんは、その子のレベルにあった仕事をさせて、「自分でできた」と思わせるのが上手だったのでしょうね。忙しいと、ついつい大人がやってしまいがちですが、子供と一緒に何かができる時期はほんのわずかです。気持ちを切り替えて、あと数年、子供のペースに合わせてみませんか。小さな失敗を経験することで、大きなけがをしない子を育てることが大切です。今でしかできないこと、今だから育つ力があるはずです。